

# 日本映画史を読み解く 10冊

複眼的思考で捉える  
歴史的特殊性とジャンルの輪郭

四方田犬彦

明治学院大学教授

少し日本映画史を面白いものにしてみよう。つまり現代の映画の経験につなぎとめて、もう一度考えてみよう。

映画の歴史というものは、けっして名作だけを論じていって理解できるものではない。なるほど小津安二郎の『東京物語』は偉大だし、北野武の『HANA-BI』は一九九〇年代の日本映画の最前線にあるといっている。けれどもそのふたつをヒマラヤの山頂のように並べてみたところで、何もわからない。どうしてこうした優れたフィルムが撮られることになったのか。そこに登場している俳優や、制作に関わったスタッフには、どのような物語があったのか。この二本の作品の間に共通するものが何で、どこが決定的に違っているのか。その違いは、どこに由来しているのか。

そして大切なことは、こうしたフィルムを観に映画館に通ったり、TVで繰り返し観たような人たちは、どこに、どのように感動したのか。彼らはどのような人たちであったのか。そうしたすべての問いかけに、映画史は答えられるようではなければならない。

わたしは今、原節子についての本を書いている。彼女のことを調べていてわかったのは、一九五三年に『東京物語』が制作される直前に、カメラマンとして彼女を撮影していた実の兄が、すぐ目の前で列車に撥ねられて死亡するという惨たらしい事件が起きていることだ。このときの原節子の嘆き方はただごとではなかったと伝えられている。もちろん事件は新聞に大きく報道され、人々は彼女に同情した。

『東京物語』で彼女がどこか悲しげな表情をした戦争未亡人を演じるのは、そのすぐあとである。その悲哀の調子はけっして演技ではなかった。観客たちがスクリーンの彼女にさまざまな物語を重ね合わせてみたことは、まず当然のことだろう。

現在のわれわれは事件を知らない。ということは、封切りの時点と現在とは、原節子の受けとり方に違いがでてくるのである。このところを押さえておかなければいけない。

では、北野武はどうか。いまや国際的な映画監督となり、イタリアでも研究書が刊